慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラーベの短編世界
Sub Title	Halb Mär, halb mehr : Raabes "Novellen"
Author	大谷, 美奈(Otani, Mina)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.80- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0204

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラーベの短編世界

大谷美奈

(I)

ヴィルヘルム・ラーベ (1831-1910) は19世紀後半の市民的リアリズムの時代に活躍した作家の一人である。»Die Chronik der Sperlingsgasse«, »Der Hungerpastor«, »Abu Telfan«, »Der Schüdderump«, »Stopfkuchen«, »Horacker« といったロマーン (長編小説) の作家として知られるラーベであるが，その短編小説も全68作品の内で実に38にのぼる。

19世紀後半のドイツ文学においては散文叙事文学が隆盛を見た。特にノヴェレ(短編小説)は全盛期を迎えていた。ノヴェレがこの時期にもてはやされていた理由について Benno von Wiese は「新しい時代の張りつめた期待と疑い，市民階級への抗議という思いが，依然として市民階級の内部にとどまってはいるが，その思い自体が主観的でありながら真実を追求することが許される叙述方法，すなわちノヴェレに自らに適した表現を見出した」[1] からと推察している。三月革命以降の経済力の上昇，市民階級の勢力増大を背景に，新しい読者，市民層を相手とする家庭週刊誌 »Unterhaltungen am häuslichen Herd«, »Gartenlaube« 等が続々と発刊された。その誌上で好まれた形式は短い散文で，作者はその要求に応じねばならないという事情もノヴェレの隆盛に拍車をかけたとみてよいであろう。

そこで，このような時代背景の中で書かれたラーベの短編小説とはいかなる特性を持っていたのであろうか。彼自身によって編まれた7編の作品集にはもっぱらそれらの短編小説が採録されているので，その作品集の成立状況や構成について個々に考察し，そこからラーベの短編小説像を浮き上がらせてみたい。

(II)

1. »Halb Mär, halb mehr« は1859年にベルリーンの Schotte から，後に1907年にベルリーンの Grote から出版された作品集で，»Eingang« (1859), »Der Weg zum Lachen« (1857), »Der Student von Wittenberg« (1857), »Weihnachtsgeister« (1857), »Lorenz Scheibenhart« (1858), »Einer aus der Menge« (1858), »Buch zu« (1858), »Wunsch und Vorsatz« (1859) を所収している。1859年版と1907年版は内容的には掲載順も含め変更された点はない。しかし，1859年版の題には作者名として Jacob Corvinus とあり，Wilhelm Raabe は括弧付きで添えられているにとどまっているが，1907年版では Wilhelm Raabe のみが作者名として掲げられ，更に Neue vollständige Ausgabe という語まで付けられている。ラーベが1856年に処女作 »Die Chronik der Sperlingsgasse« を発表した際用いていた筆名が Jacob Corvinus である。当時二十代であった彼が市井の老人を気取って書いたこの小説は成功を博し，作家として生活してゆく自信を与えられたラーベは，以後1859年のいわゆる教養旅行まで，この筆名で作品を発表している。ここに収められている作品はいずれもその旅行以前に書かれたものであるから，1859年当時では Jacob Corvinus の作品集としての方が自然なことであろう。また，この作品集の特筆すべき点として3編の詩を含んでいることが挙げられよう。»Eingang«, »Buch zu« と »Wunsch und Vorsatz« の3編で，いずれもこの作品集のために作られたもので，»Eingang« は序として，他の2編は結びとして置かれている。ラーベの作家としての活動期間はベルリーン・ヴォルフェンビュッテル時代 (1854-1862)，シュトゥットガルト時代 (1862-1870) とブラウンシュヴァイク時代 (1870-1902) の3期に分けることができる。作家としての活動を始めた初期に編まれたこの作品集は，「まだ売れない作家だった頃は仕事机の下に投げ捨てたのに，いくらか名声を得てからまた取り上げてみようという誘惑をする紙切れ」[2] という酷評からも察せられるように，ほとんど評価されなかった。

2. »Verworrenes Leben« は1862年にグローガウの Flemming から出

版された作品集で，»Die alte Universität« (1858), »Der Junker von Denow. Historische Novelle« (1858), »Aus dem Lebensbuch des Schulmeisterleins Michel Haas« (1859), »Wer kann es wenden? Eine Phantasie in fünf Buchstücken« (1859), »Ein Geheimnis. Lebensbild aus den Tagen Ludwigs XIV« (1860) を所収している。この作品集は Wilhelm Raabe で発表しているが，Jacob Corvinus として発表した作品もあることから，今度は Jacob Corvinus が括弧付きで添えられている。ラーベは最初の作品集を出した Schotte に 1860 年 11 月，それまで雑誌でのみ発表されていた作品を 1 冊にまとめることを提案した[3]。しかし，その際 »Auf dunkelm Grunde« という当時未発表の作品も含めるよう要請したにもかかわらず，ラーベは気が変って，先に雑誌に発表したいのでこの作品だけ作品集から除くように提案したが，Schotte は作品集そのものを見送ってしまった。そこで，ラーベは翌 1861 年 10 月に初めに Schotte に提案した際には含まれていなかった »Ein Geheimnis« の入った作品集出版の話を Flemming に持ち込み，今度は承諾を得て，翌年 9 月に出版された作品集を手にすることとなる。この作品集に収録されている 6 編はいずれも雑誌 »Westermann's Illustrierte Deutsche Monatshefte« に掲載されたものである。»Wer kann es wenden?« は 1859 年の 12 月号に掲載されたものであるが，Wilhelm Raabe として初めて登場した作品である。この作品集も顧みられることはほとんどなかった。Fritz Martini は「最初の 2 つの作品集はまだ借り物でうごめいている。省察的な感情と劇風またはバラード風の要素とが混ざっていて，何もかも叙情的な色づけをされた文調を持つ »Die Chronik der Sperlingsgasse« の映像技術を選んでいる」[4] と評しているが，唯一 »Der Junker von Denow« は抜きん出た歴史小説であるとしている。

3. »Ferne Stimmen« は 1865 年にベルリーンの Janke から出版された作品集で，»Die schwarze Galeere. Geschichtliche Erzählung« (1860), »Eine Grabrede aus dem Jahre 1609« (1862), »Das letzte Recht. Novelle« (1862), »Holunderblüte. Eine Erinnerung aus dem „Hause des

Lebens"« (1863) を所収している。この作品集は表題も収録されている4作品もラーベが1864年10月に Janke に作品集出版を提案した段階から何ら変更されることもなく，1865年に上梓されている。»Die schwarze Galeere« は Geschichtliche Erzählung (歴史物語) と附されているように16世紀後半のオランダ独立戦争期を取り上げており，また »Eine Grabrede aus dem Jahre 1609« は1609年に亡くなった人物の67年の生涯，»Das letzte Recht« は18世紀初頭，»Holunderblüte« は回想形式の枠物語であるが核となる話では1819年頃のプラークをそれぞれ描いている。4作品いずれも1865年当時から見ると過去を題材としている。過去に展開する話ばかりを集めているということに，表題の Ferne Stimmen (遠い声) は由来しているのであろう。»Eine Grabrede aus dem Jahre 1609« を除く3編は人口に膾炙したものであるが，特に »Die schwarze Galeere« はラーベの作品の中で商業的な成功を収めたという点では »Die Chronik der Sperlingsgasse« に匹敵する[5]。ヴォルフェンビュッテル時代最後の作品となった »Das letzte Recht« にはラーベ自身によって Novelle と銘打たれている。この作品はラーベのものとしては唯一パウル・ハイゼとヘルマン・クルツによって編纂された『ドイツ短編珠玉集』(»Deutscher Novellenschatz«) に収められたものである。ハイゼは1873年11月にラーベに，1871年から続いている自分の編になる短編集の第21巻に彼の作品を1編収録したいと打診してきた[6]。これに対してラーベは »Ferne Stimmen« をハイゼの許に送ったが，自分自身は »Holunderblüte« を推している旨も書き添えていた。しかし，1874年6月に届いたハイゼの返事は「»Holunderblüte« よりも »Das letzte Recht« の方がよりノヴェレである[7]」として，»Das letzte Recht« を選ぶことへの同意を求めるものであった。結局ラーベもこの選択に同意して，翌1875年5月に »Das letzte Recht« の入った『ドイツ短編珠玉集』第21巻を受取ることとなる。ラーベが推薦した »Holunderblüte« は象徴的な視点という新たな，そしてシュトゥットガルト時代の特徴となる作風を備えた小説で，この »Ferne Stimmen« 中で唯一シュトゥットガルトで執筆されたものでもある。»Die

Chronik der Sperlingsgasse« がラーベの作品の序曲であるように，この »Holunderblüte« もシュトゥットガルト時代の序曲であると Hermann Pongs は見做している[8]。

4. »Der Regenbogen« は 1869 年にシュトゥットガルトの Hallberger から出版された 2 巻の作品集で，第 1 巻には »Die Hämelschen Kinder« (1863), »Else von der Tanne oder das Glück Domini Friedemann Leutenbachers, armen Dieners am Wort Gottes zu Wallrode im Elend« (1864), »Keltische Knochen, eine rührend heitre Geschichte« (1864), »Sankt Thomas« (1865) が，第 2 巻には »Die Gänse von Bützow« (1865), »Gedelöcke, eine absonderliche, doch wahre Geschichte« (1866), »Im Siegeskranze« (1866) を所収している。1868 年にラーベは »Holunderblüte« 以降 1863 年から 1866 年の間に雑誌で発表した短編をまとめることにした。»Über Land und Meer«, »Freya«, »Die Maje« と »Westermann's Illustrierte Deutsche Monatshefte« 誌上で発表された作品は全部で 7 編あった。7 という数からの連想とゲーテの詩『格言風に』(»Sprichwörterlich«) の一節「繊細な詩はちょうど虹にして / 暗い大地の上に生れる / つまり詩人の才能には / 憂鬱の要素が背景にある」[9] から虹 (Regenbogen) という題名がこの作品集に与えられた[10]。1869 年に出版されたこの »Der Regenbogen« は注目を集め，翌 1870 年にはオランダ語に翻訳されている。古代人の骨の発見をめぐる »Keltische Knochen« 以外は過去に題材を求めた小説で，ラーベの歴史小説への関心を窺わせる。有名な伝説「ハーメルンの笛吹き男」への新解釈を試みた »Die Hämelschen Kinder«，18 世紀の啓蒙主義時代のコーペンハーゲンを舞台に信仰に対する寛容の無さへ痛烈な皮肉を向けている »Gedelöcke« と，»Der Junker von Denow« や »Die schwarze Galeere« と同じくオランダの独立戦争を舞台としている »Sankt Thomas« には単に歴史上の逸話を扱っているということ以上の風刺や情念が伝わってくる。それは殊に象徴的なものにまで高まった抒情性が漂い，それぞれ女主人公が悲劇的な運命をたどる »Else von der Tanne« と »Im Siegeskranze«，フランス革命期に鷲鳥を路上

で歩き回らせることを禁じた支配者への反抗という事件を滑稽に描いた »Die Gänse von Bützow« において感じられる。»Die Gänse von Bützow« の作者の風刺は Georg Lukács や Martini の指摘の通り[11]，ドイツの俗物性に向けられており，このモティーフは続いて書かれた長編小説 »Abu Telfan« に受け継がれている。シュトゥットガルト時代にラーベは初期の作に見られた理想主義の作風から脱却して，独自の文体を獲得していくが，シュトゥットガルト三部作と呼ばれる長編小説 »Der Hungerpastor«, »Abu Telfan«, »Der Schüdderump« に関してだけでなく，この短編を集めた »Der Regenbogen« からもその成長の様子を感じることができよう。

5. »Deutscher Mondschein« は 1873 年にシュトゥットガルトの Hallberger から出版された作品集で，»Deutscher Mondschein« (1872), »Der Marsch nach Hause« (1870), »Des Reiches Krone« (1870), »Thekla's Erbschaft oder die Geschichte eines schwülen Tages« (1865) を所収している。1870 年 7 月にラーベは家族と共にシュトゥットガルトからブラウンシュヴァイクへ移住した。そして 1872 年にシュトゥットガルト時代に雑誌で発表した作品をまとめることを計画した際彼の手元にあった該当作品は »Der Marsch nach Hause«, »Des Reiches Krone« と »Thekla's Erbschaft« であった。ラーベの打診を受けた Janke は本として薄過ぎるとして，もう 1 作ノヴェレを書くことを勧めた[12]。そこでラーベは数年来温めていた腹案を取り出して »Deutscher Mondschein« を書き上げたが，この 4 作品からなる作品集についても Janke はまだ満足せず，突き返した。結局ラーベは »Der Regenbogen« を出した Hallberger にこの作品集を持ち込み，未発表の »Deutscher Mondschein« をまず Hallberger の所有する »Über Land und Meer« に掲載してから，»Vier Erzählungen« という題で出版させることで合意した。Hallberger に »Vier Erzählungen (四物語)« という題では簡単過ぎるから「もっと煽情的な」題に変更するよう求められたラーベは Deutscher Mondschein を表題として選んだ[13]。この題名となった »Deutscher Mondschein« は他の 3 作と違いブラウンシュヴァイクで書かれた作品であるが，その骨子はすでに 1864 年夏に家

族と北海沿岸を旅行した時に思いつかれていた[14]。典型的なプロイセンの役人の心中にある幻想や詩的世界への憧憬は現実の生活の中では抑圧されているが，月光の下で抑圧されている感情が覚醒して激しい葛藤に主人公は苦しむ。Pongs の説に従えば，この抑圧されている無意識なものは数年後にニーチェが「ルサンチマン」と，更にその後フロイトが「コンプレックス」と呼ぶものに相当する[15]。二年程ためらった後に発表された »Thekla's Erbschaft« はベルリーンでの下宿生活を懐しんでの滑稽な話であるし，シュトゥットガルト時代の最後に書かれた »Der Marsch nach Hause« は三十年戦争を，»Des Reiches Krone« はフス戦争を背景とした歴史小説である。»Des Reiches Krone« は象徴的な題を持ち，「ドイツ帝国の王冠はまだニュルンベルクにある——誰がこの世で再びその王冠を尊崇させるのであろうか?」[16] という結語は明らかにラーベの同時代人への問いである。この小説の完成直後の 1870 年に普仏戦争が勃発し，翌年ドイツ帝国が誕生したわけであるが，「帝国」の王冠の原像に迫ったこの小説で来るべき帝国への期待を寄せたラーベであったが，その期待はやがて失望に変り，帝国誕生後の繁栄にうかれる社会とは距離を置くようになった。ラーベの作品の中では数少ない現代を描いた短編である »Deutscher Mondschein« は，彼のこのような心理状態が投影されている。

6. »Krähenfelder Geschichten« は 1879 年にブラウンシュヴァイクの Westermann から出版された 3 巻の作品集で，»Zum wilden Mann« (1873), »Höxter und Corvey« (1874) を第 1 巻に，»Eulenpfingsten« (1874), »Frau Salome« (1874) を第 2 巻に，»Die Innerste« (1874), »Vom alten Proteus. Eine Hochsommergeschichte« (1875) を第 3 巻に所収している。1877 年にラーベは »Westemann's Illustrierte Deutsche Monatshefte« 誌上で発表した 6 編の作品を »Vom alten Proteus« という題で 1 冊にまとめることをまず Grote へ持ち込み，断られ，Westermann が »Wunnigel« と »Deutscher Adel« の 2 作品の権利付きで出版を引受けた。Westermann は »Vom alten Proteus« という題は印象が薄いとして変更を求め，そこで »Krähenfelder Geschichten« と命名されることになった[17]。Krä-

henfeld とは当時ラーベの住んでいたブラウンシュヴァイクの市壁の外の，アウグスト門の前の地域を指す名称である。ラーベは »Abu Telfan« でもギリシア神話中の人物プロテウスに言及しているが[18]，この海の老人をその変身の才から流転する人生の象徴と見做していただけでなく，そこに人間の創造力も見ていたので，作品集の題名として »Vom alten Proteus« を選ぼうと考えたのであろう。人生の破壊と防御という共通のモティーフ，未解決のままの終り方がこの作品集がラーベの作品集の中では「唯一テーマに比較的統一性のあるもの」[19] と見做される所以であろう。過去を舞台としている »Höxter und Corvey« や »Die Innerste« の中にもラーベの時代批判は感じられるが，ハールツ地方の伝説を »Die Innerste« 同様に巧みに取り入れている現代小説 »Zum wilden Mann« においてその同時代の俗物性への辛辣な風刺はより鮮明に伝わってくる。それ故に，同時代の作家ゴットフリート・ケラーはこの本を読み，敵役への激しい怒りを覚えたり[20]，友人からラーベは，読者に不快感を与えるから禁書にすべきと進言されたりした[21]。しかし，1884年に Reclam がその文庫 (»Reclams Universal-Bibliothek«) の2000番にドイツの作家の代表的な作品を持ってこようと考え，ラーベに依頼してきた時に作者に選ばれた小説はこの »Zum wilden Mann« であった。ラーベはハイゼ宛の手紙で，このレクラム文庫は流行に左右されずに真の文学作品を守るものと高く評価していたので[22]，作品選択に際しても質的な面のみを考慮した。そして，その選択について後年「優れた作品なので」選んだ[23] と述べているように相当の自信を持っていた。フランクフルトを舞台とした，独特のフモールの感じられる »Eulenpfingsten« の中にも，ハールツ地方の陰鬱な風景の中の悲劇的な »Frau Salome« の中にも，経済力の上昇に安閑としている俗物的な社会への批判がこめられている。人生の惨めさ，醜悪さをフモールを交えて描き，過去の出来事が象徴性を帯びるというラーベ独自の作風がこの6編で確立されたのであるが，以後の »Horacker« やブラウンシュヴァイク三部作といわれる »Alte Nester«, »Stopfkuchen« や »Die Akten des Vogelsangs« 等の晩年の代表作につながっていくこの小説群も »Krähen-

felder Geschichten« として出版されるまでは注目されていなかったということで，雑誌での発表という1回限りの形で終らせずに，1冊の作品集として発刊させた意義は大きい。

7. »Gesammelte Erzählungen« はベルリーンの Janke から出版された4巻の作品集で，第1巻は1896年に »Die alte Universität«, »Der Junker von Denow«, »Aus dem Lebensbuch des Schulmeisterleins Michel Haas«, »Wer kann es wenden?«, »Ein Geheimnis«, »Die schwarze Galeere«, »Eine Grabrede aus dem Jahre 1609«, »Das letzte Recht«, »Holunderblüte« の9作品を所収して，第2巻は同じく1896年に »Die Hämelschen Kinder«, »Else von der Tanne«, »Keltische Knochen«, »Sankt Thomas«, »Die Gänse von Bützow«, »Gedelöcke«, »Im Siegeskranze«, »Thekla's Erbschaft«, »Der Marsch nach Hause«, »Des Reiches Krone«, »Deutscher Mondschein« の11作品を所収して，第3巻は続く1897年に »Höxter und Corvey«, »Eulenpfingsten«, »Frau Salome«, »Die Innerste«, »Vom alten Proteus« の5作品を所収して，そして第4巻は1900年に »Meister Autor oder die Geschichten vom versunkenen Garten« (1874), »Wunnigel« (1877), »Deutscher Adel« (1878) の3作品を所収して刊行されている。1895年にラーベは Janke とそれまで刊行された作品集を更に一つにまとめることで合意し，早速その準備に取りかかった[24]。彼は年代順に編集しているが，最初の作品集 »Halb Mär, halb mehr« からは一作も選ばなかった。2番目の作品集 »Verworrenes Leben« と3番目の »Ferne Stimmen« の全作品で構成された第1巻は好評であった。4番目の »Der Regenbogen« と5番目の »Deutscher Mondschein« の全作品で構成された第2巻では »Deutscher Mondschein« の作品に関して成立順に並び換えられている。第3巻は »Zum wilden Mann« を除く6番目の作品集 »Krähenfelder Geschichten« の5作品で構成されているが，»Zum wilden Mann« をレクラム文庫に選んだ時点でラーベは »Krähenfelder Geschichten« の一体性を犠牲にしたため，自ら解消してしまった作品集の残り5作をここに収拾したことになる[25]。更に1900年に第4巻を出版

することが具体化した際，ラーベは以前から収録したいと思っていた3作品を採った。ラーベの70歳の誕生日が盛大に祝われた1901年からそれまで忘れられたかのようであった彼への関心が高まり，それに伴って作品も読まれるようになった。しかし，ラーベ自身は「第1巻はよく読まれているが，第2巻となると翳りが見え始め，第3巻と第4巻は関心も持たれていない」[26] と移り気な大衆への失望を吐露している。

(III)

ラーベ自身の編になる作品集について駆け足でたどってきたが，Hermann Helmers の分類[27]ではノヴェレやエアツェールング（物語小説）とされているものでどの作品集にも収録されていないものが9作品ある。»Verworrenes Leben« の項で名前のでた »Auf dunkelm Grunde« と他の分類[28]ではロマーンと見做されているもの（»Unseres Herrgotts Kanzlei« および »Der Dräumling«）や死後発表されたもの（»Der alte Tag«）と »Krähenfelder Geschichten« 後に発表された作品である。ロマーンは長編小説，ノヴェレは短編小説，エアツェールングは物語小説と日本語訳が当てられている[29]。しかし，ラーベの例でもわかるように，その分類は厳密な規定によって明確な判断を下すことが難しい。そして，ノヴェレとエアツェールングの区別の方がロマーンと他の二概念との区別より困難であろう。それでは，ラーベの短編はノヴェレとエアツェールングのいずれの名称が適しているであろうか。

ローマのユスティニアヌス帝の法典の法律用語を語源とするノヴェレはゲーテに「生起せる未曾有の出来事」を表わすものと定義され[30]，A. W. シュレーゲルに「ノヴェレは決定的な転換点 (Wendepunkt) を持たねばならず」それによって「話の主要部分がはっきりと目立つ」と提唱され[31]，その概念を受け継いだルートヴィヒ・ティークは転換点を日常的であると同時に不可思議なものと結び付けた[32]。このように理論づけされたノヴェレは1834年にすでにテオドーア・ムントが「ドイツの家畜」[33] と呼んだように19世紀後半のドイツにおいては雑誌，新聞の爆発的発展の中で需

要過多による質の低下を招きつつもドイツの市民の家庭に受け入れられていた。

「未曾有の出来事」が単なる日常の事件となり，ノヴェレの形式が多様化していく中でノヴェレの規範性を求めたのがハイゼであった。彼は前述のように1871年以来『ドイツ短編珠玉集』を編纂したが，その第1巻の序文が「鷹の理論」と呼ばれる有名なノヴェレ論である。ハイゼはまずノヴェレとロマーンの相違に言及し，両ジャンルの区別は「長さ」や「量」の点にあるのではないと強調している。「テーマ」や「問題の取り上げ方」，「内容」の相違に区別の基準を置き，「ノヴェレはただ一つの生活圏の中で単一の葛藤，一個の道徳的理念ないしは運命理念あるいははっきりと区別された一つの性格像を描くべきものである...事件そのものがノヴェレでは主要事項なのである」[34] としている。そして，『短編集』の作品選択基準に触れ，次のように述べている。

「しかしながら概して我々はこの短編珠玉集の作品選択の際にもその根本思想が最も明確にまとまり完全であって，かつ——多かれ少なかれ内容豊かで——まだ構想にしか過ぎない時にすでに何か独特なもの，特殊なものを表わしているかのようなノヴェレを優先するといった法則に従う。一つの強烈なシルエット——もう一度画家の言葉を借りるなら——が本来の意味でノヴェレと呼ぶものに欠けていてはならないのであり，ノヴェレのモティーフとして優れているか否かの吟味は大抵の場合，その小説の内容を数行に凝縮して表現しようとする試みがその短編に短い上書きを付けて通人にはすでに前もって主題の特殊な価値を教えたというあの昔のイタリア人[ボッカチオ]がなしたようなやり方において成功しているか否かという点にあると思う。ボッカチオの[デカメロンの]5日目第9話の梗概，「フェデリーゴ・デリ・アルベリギは恋心を抱くが片思いに終る。騎士にふさわしい身を挺しての求婚で財産を使い果たし，手には一羽の鷹だけが残る。偶然その愛する婦人の訪問を自宅に受け，食事に供するものが何もないので鷹

を食膳に出す。婦人は彼がなしたことを知って，急に心を変え，彼を夫とし，財産をも与え，彼の愛に報いる。」[35)]

この話に出てくる鷹こそハイゼの説く「特殊なもの」すなわち「強烈なシルエット」に当たる。

この『短編珠玉集』にラーベの »Das letzte Recht« が収録された時の経緯は前述した通りである。確かに »Das letzte Recht« は刑吏の特権，銀城館をめぐる所有権，そして最後に神の下される権利と，「権利」がハイゼの説く「鷹」であると見做しうるし，その権利を根本思想として展開する筋は多岐にわたることなく最後のクライマックスへと進む。ハイゼの要求するノヴェレ像を充たしていると言えよう。一方，ラーベの推した »Holunderblüte« は枠物語であるが，その枠の語りと核となる話をつなぎ，話の舞台となる「生命の家」と呼ばれるプラークのユダヤ人墓地に咲いている「ライラックの花」は「鷹」と見做しうるし，現在と過去が対照的に配置された構成も特定の状況への集中が感じられ，ノヴェレとしての要素を充たしているとも考えられよう。しかし，ライラックの花に象徴される死という根本思想は人間存在にかかわる事柄で，容易に答えの出てくるものではない。それに伴う重苦しい気分が終りのない不安として残り，同じ »Ferne Stimmen« に収められている，事件の明快な解決という形で終る »Die schwarze Galeere« や »Das letzte Recht« とは異なる読後感を与える。この印象がハイゼの選択に影響を及ぼしたのではないであろうか。

»Holunderblüte« やそれに続くシュトゥットガルト三部作と呼ばれる長編小説を通して，ラーベは根本的な人間存在と取り組み，内面的な世界を追求するようになり，もはや初期の頃のように逸話や叙情的なバラードには満足しなくなる。そうなると内容的にもハイゼの提唱するノヴェレの扱うものではなくなり，形式的にも更に伸張されて，むしろロマーンの方向を指していると見ることができなくもない。

ラーベは最初の作品集に関しては以後の »Gesammelte Erzählungen«

に再収録しなかったことで若き日への作品への判定を下している。»Verworrenes Leben« でもまだ逸話にたより，風俗画的で全体を統一する共通項は見出せない。»Ferne Stimmen« と »Der Regenbogen« では現代を扱っているものが1作と歴史小説が多いが，ラーベの画才は歴史小説での描写や人物像に大いに力を貸している[36]。この2つの作品集に収録されているものからラーベ独特の小説技法が確立しつつあることが感じられる。そして »Deutscher Mondschein« 中の »Des Reiches Krone« で見せた円熟した技巧が »Krähenfelder Geschichten« で見事に展開される。ラーベは「Geschichten」と名付けたが，手紙では「Novellen」と呼んでいるように[37]，明らかにここでは当時流行のジャンルであったノヴェレを意識して創作している。しかし，彼の作品はハイゼの提唱していたようなノヴェレとは異なる独自の世界を築いている。ロマーンとはちがって単一の運命を追ってはいるが，人間存在の深淵に迫り，解かれぬ謎として終る内容はノヴェレのものとは言い難い。ロマーンよりは短く，簡略な筋を持ち，さりとてノヴェレほどはっきりとした特徴づけを持たずに，中心事件を厳密に追っているのでもないというラーベの短編の性格はまさにエアツェールングと呼ぶにふさわしいものではないであろうか。

ラーベの小説の特徴として冗長にも思えるような語り口，複雑多岐にわたる筋，内面性やフモールなどが挙げられる。このようなラーベの特性は規律で固められた枠の中ではその力を存分に発揮することはできない。Martini は「偉大な作家ほど独創的な形式を作り出し，形式的な規範に従わないものだ。芸術的には非常に限界のあった作家であるハイゼが標準化された形式を造ろうとしたのは偶然ではなかった」[38] と評している。

ラーベの作品集の歴史は，彼が作家としての個性を追求しつつ獲得していった立場を，独自の文体として，自信をもって明かすところの作家の成長史とも言い得よう。

注

ラーベの作品の引用はすべて，Sämtliche Werke. Im Auftrage der Braunschweigischen Wissenschaftlichen Gesellschaft hg. von K. Hoppe. Bd. 1-20. erg.

Bd. 1-5. Göttingen. 1951 ff. による。以下 BA と略し，巻数とページ数のみを示す。

1) Benno von Wiese: Novelle. 4. Aufl. Stuttgart. 1969. S. 66.
2) BA. Bd. 2. S. 551.
3) BA. Bd. 3. S. 507.
4) Fritz Martini: Deutsche Literatur im bürgerlichen Realismus 1848-1898. 4. Aufl. Stuttgart. 1981. S. 706.
5) BA. Bd. 3. S. 522.
6) BA. Bd. 9/1. S. 408.
7) ebd. S. 409.
8) Hermann Pongs: Wilhelm Raabe. Leben und Werk. Heidelberg. 1958. S. 207. ヘッベルがラーベの処女作 »Die Chronik der Sperlingsgasse« を「見事な序曲」と評したことを踏まえている。
9) 引用は内藤道雄訳による。『ゲーテ全集 1』(潮出版社，1979)，282 ページ。
10) BA. Bd. 9/1. S. 447. なお »Auf dunkelm Grunde« (1861) の表題もこの一節に由来する。
11) Georg Lukács: Wilhelm Raabe. In: Raabe in neuer Schicht. Stuttgart. 1968. S. 46. Martini, S. 707.
12) BA. Bd. 9/2. S. 477.
13) ebd.
14) BA. Bd. 9/2. S. 503.
15) Pongs, S. 326.
16) BA. Bd. 9/2. S. 378.
17) BA. Bd. 11. S. 478.
18) BA. Bd. 7. S. 380.
19) Martini, S. 705.
20) BA. Bd. 11. S. 477.
21) ebd. S. 476f.
22) BA. erg. Bd. 2. S. 179f.
23) Fritz Hartmann: Wilhelm Raabe. Wie er war und wie er dachte. Gedanken und Erinnerungen. Hannover. 1910. S. 64.
24) BA. Bd. 9/1. S. 412.
25) BA. Bd. 11. S. 479f.
26) ebd. S. 457.
27) Hermann Helmers: Wilhelm Raabe. 2. Aufl. Stuffgart 1978 (Sammlung Metzler 71). S. 28, S. 39 および S. 60f.
28) Hans Oppermann: Wilhelm Raabe in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. Reinbek. 1970.
29) 『ドイツ短編小説の系譜——成立期から 19 世紀末まで』(クヴェレ会，1977 年)，3 ページ。

30) Johann Wolfgang Goethe — Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe. 24. Aufl. Wiesbaden. 1949. S. 177f. In: Karl Konrad Polheim (Hrsg): Theorie und Kritik der deutschen Novellen von Wieland bis Musil. (Deutsche Text 13). Tübingen. 1970. S. 54. (以下 Polheim と略す)

31) August Wilhelm Schlegel: Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst. III. Teil.: Geschichte der romantischen Literatur. Heilbronn. 1884. S. 242-248. In: Polheim, S. 18f.

32) Ludwig Tieck: Vorbericht. In: L.T.s Schriften. XI. Bd: Schauspiele. Berlin. 1829. S. LXXXIV-XC.

33) Theodor Mundt: Moderne Lebenswirren. Briefe und Zeitabenteuer ein es Salzschreibers. Leipzig. 1834. S. 155-157. In: Polheim. S. 71.

34) Paul Heyse: Einleitung. In: Deutscher Novellenschatz. Hrsg. von Paul Heyse und Hermann Kurz. I. Bd. München. 1871. S. VII-XX.

35) ebd. S. 148f. 但し[ ]内は筆者注。なお引用は平田達治『ラーベの短編集「遠い声」について——第二部——「最後の権利」』(『独仏文学研究』関西学院大学文学部独文学科研究室第四輯, 1961年), 35ページ以下を参照している。

36) 画家としてのラーベに関しては Karl Hoppe: Wilhelm Raabe als Zeichner. Göttingen. 1960. や Hans-Werner Peter: Wilhelm Raabe. Federzeichnungen und Skizzen. 等が出されている。

37) BA. erg. Bd. 2. S. 182.

38) Martini, S. 624.